

専門高校の生徒の部活動と学校適応

——部活動における専門性を視野に——

熊谷 信司（東京大学大学院教育学研究科博士課程）

◆要約

- ◎普通科でも専門学科でも、部活動加入者のほうが学校への適応（ここでは「学校生活満足度」を指標に用いた）が高い。
- ◎部活動加入が学校生活満足度にもたらす効果は、学校生活の他の諸側面を統制しても成り立つ。それは特に部活動満足度が高い生徒のほうが効果が高い。
- ◎部活動の組織形態に着目した場合、専門学科では文化部加入者のほうが運動部加入者より学校生活満足度に正の効果を高くもたらしていた。これは、専門学科における「専門系」の部活動の存在などが、文化系部活動の位置づけに影響を及ぼし、普通科との機能の違いとなってあらわれている可能性がある。
- ◎以上から、専門学科における部活動の意味や、生徒の学校生活全般を改めて問い直していく視点を提起する。

1 問題設定

日本の学校、特に中等教育において、授業を中心とした学習活動以外に、生徒たちにとって大きな活動の軸となっているのが部活動である。人間関係の側面から見ても、部活動はある一定の興味や目的を持って任意に加入・参加する有機的な社会集団であり、クラス（ホームルーム）や学科・学年の枠を超えた人間関係が形成されるという意味でも、生徒たちの社会化や社会関係資本の形成にとって重要な意味を持つといえる。

学校教育における部活動そのものの位置づけは、近年も変化している。たとえば中学校については、2008年に文部科学省が発表した次期の学習指導要領案で、「学校教育の一環として、教育課程との関連が図られるよう留

意すること」と記され（文部科学省 2008: 6）、それに向けた中学校現場の課題に関する研究なども行われている（中澤ほか 2009）。

このように、部活動は生徒たちの学校生活という観点から、また学校経営や教育実践という面においても、日本の中等教育を考える際には重要な課題といえるだろう。

2 先行研究の検討

高校生の学校生活と部活動の関係を総合的に扱った先行研究はそれほど多くないが、たとえば白松（1995）は部活動と生徒文化、およびその分化との関係を検討している。これによると、部活動加入者は不加入者より学校への適応度合いが高いことが実証されている。

また、ひとくちに部活動に加入していると

いっても、その内実は多様である。近年の研究をいくつか挙げれば、白松（1995）は加入者内部でも「自発的参加者」のほうが「事実的参加者」よりも、また組織特性から見て活動が盛んな部活動加入者のほうが、それぞれ学校適応や友人志向に正の効果を持っていることなどを実証している。長谷川（2005）は部活動の組織形態（運動部（団体／個人）や文化部（音楽系／その他））と学校生活やサブカルチャーとの関係を検討し、山口ほか（2004）は学校タイプ（普通科進学校／他の普通科高校／専門高校）別に学校・日常生活の諸側面との関連性を検討している。

ただ、こうして見ていった場合でも、専門高校内部での分化の様子や、その特徴が十分に実証されていない点が指摘できるが、西島ほか（2003）は、「多元的学校文化モデル」の枠組みを用いて、成績（授業）だけでなく部活動や学校行事などの学校生活の諸側面へのコミットメントを分析している。ここでは高校生を「行事・部活型」「学業・部活型」「部活型」「休み時間型」に類型化し、専門学科は普通科に比べて「部活型」が少なく、「休み時間型」が多いという結果になっている。

そうであるならば、専門高校の生徒は学校適応という点でも困難を抱える度合いが高く、学業面以外で学校適応を図れる可能性のある部活動などへのコミットメントもうまくっていない可能性がある。

しかし、専門高校にはそのような困難を乗り越える手がかりはないのだろうか。また、そのために従来の研究でとらえ切れてこなかったものはないだろうか。それを検討するためには、専門学科内での高校生の部活動と学校生活との関係をより詳細に分析していく必要がある。

3 仮説

本稿では、全体に普通科と専門学科を比較しながら、以下のような点を検証していく。

- 理論仮説1：部活動への加入（参加）は、学校生活への適応に正の効果を持っている。
- 作業仮説1：部活動に加入している生徒ほど、学校生活満足度が高い。
- 理論仮説2：専門学科・普通科とも、部活動への加入（参加）は、他の学校生活の諸側面を統制しても、学校生活への適応に正の効果を持っている。
- 作業仮説2：専門学科・普通科とも、性別、成績、学習へのコミットメント、学校行事へのコミットメント、友人関係満足度、および部活動加入を独立変数とした回帰分析において、部活動加入は学校生活満足度に有意に正の効果を持つ。
- 理論仮説3：仮説2にもかかわらず、部活動加入（参加）者内部でも、部活動への関与や組織形態の違いにより、学校生活への適応度合いに違いが見られる。
- 作業仮説3-1：他の学校生活の諸側面を統制しても、部活動満足度が高い生徒のほうが学校生活満足度が高い効果をもたらす。
- 作業仮説3-2：他の学校生活の諸側面を統制しても、運動部加入者のほうが文化部加入者より学校生活満足度に有意に高い効果をもたらす。

4 分析

4.1 部活動への加入状況

まず、全体像を概観的に把握するために、今回のデータで高校生の部活動への加入状況を、若干の基本属性とともに確認しておく。なお、以下、本章で用いるデータはすべてウェイト1をかけて分析している。

調査時点（高校2年生の10～12月）における回答者の部活動の加入状況は、専門学科全体で見ると「運動部に入っている」（以下、「運動部」）が32.0%、「文化部に入っている」（以下、「文化部」）が25.3%、「運動部・文化部の両方に入っている」（以下、「かけ持ち」）

が5.2%で、何らかの部活動に加入している比率は合計で62.5%である。一方、「どちらにも入っていない」（以下、「(部活動)非加入」）は37.5%であった（図1）。

これを普通科の生徒との比較という観点から見ると、専門学科では「運動部」の比率がやや低く、逆に「文化部」および「かけ持ち」の比率がやや高くなっており、全体としては普通科より部活動の加入率が6.7ポイント高かった。

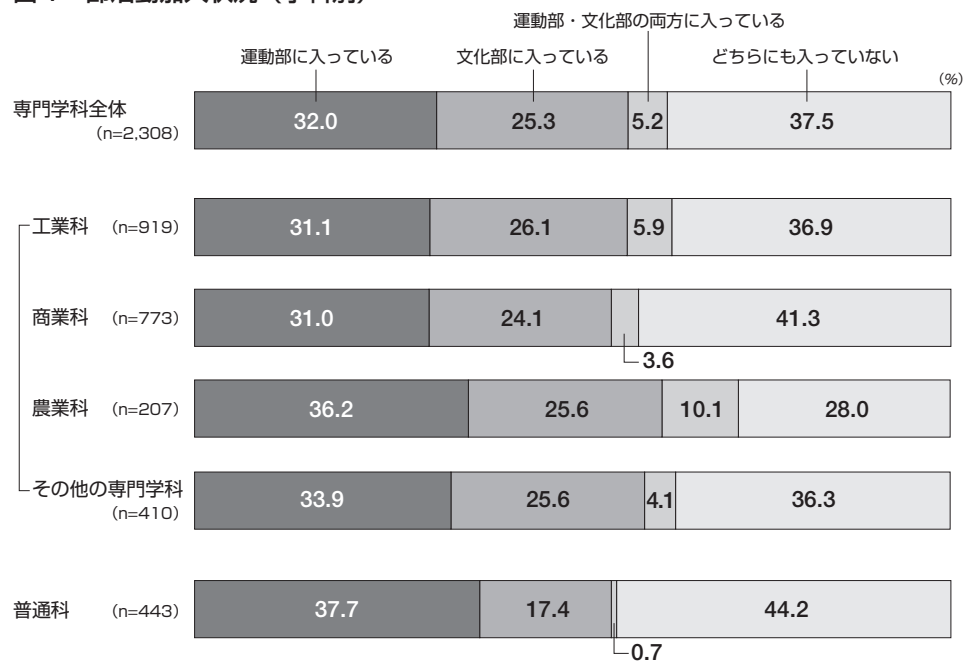
東京都全体の状況を見ると、東京都教育委員会の課外活動振興協議会（2007）によれば、2006年度における都内の公立高校（全日制課程）の生徒の部活動加入率は、運動部が49.4%、文化部が25.2%となっている。部活動の加入状況については個々の学校差もあるが、高校教育全体構造の中では、一般的には部活動加入率と高校タイプの間には関連があることが他の調査結果からも示されており、専門学科や、入試難易度が専門学科に近い普通科

では、部活動加入率が低くなっている（西島ほか 2003；西島編 2006）。

それを踏まえた上で、今回の回答者の部活動加入率を東京都全体の様子に位置づけてみると、運動部加入者全体（ここでは「運動部」＋「かけ持ち」）については専門学科・普通科ともに東京都平均より低く、先述の先行研究結果とも整合する。一方、文化部加入者全体（ここでは「文化部」＋「かけ持ち」）については、普通科は同様に東京都平均より低い、専門学科では東京都平均よりむしろ高い。この点については、後ほど改めて検討する。

また、図表は省略するが、ジェンダー別に見ると、「運動部」加入率は、男子で専門学科36.2%／普通科48.1%、女子では同26.4%／28.1%、「文化部」加入率は、男子で同22.7%／10.5%、女子で同28.7%／23.2%である。特に男子で、専門学科の生徒では運動部加入者が相対的に少なく、文化部加入者が多い。

図1 部活動加入状況（学科別）



クラス内成績別に見ると、成績上位層のほうが下位層に比べて部活動加入率が高くなっており、クラス内成績を3段階に分けた場合、専門学科で「部活動非加入」の割合は、クラス内成績が「下・中の下」では43.0%であるのに対し、「中」では37.1%、「中の上・上」では29.8%であった。

4.2 部活動加入と学校適応の関係

ここでは、仮説1として、先行研究と同様に、部活動への加入が、学校生活への適応に正の効果を持っているかを確認する(表1)。なお、ここでは学校生活に関する質問項目として、「学校生活満足度」(Q7F)を適応の指標として従属変数に用いることとする。

まず、専門学科で部活動に加入しているかどうかで学校生活満足度を見ると、加入している生徒では64.4%であるのに対し、非加入の生徒では50.1%にとどまり、部活動は学校生活満足度を高める影響力を持っていることが確認できる。また、この分布傾向は普通科でもほぼ同様である。

表2は専門学科をさらに学科別でクロス集計したものであるが、部活動加入者と非加入者の間では、学校生活満足度の差がおおよそ10~18ポイントあり、部活動加入者の満足度が高い。

4.3 学校生活満足度の規定要因

前項では部活動と学校生活満足度の対応関係のみを扱っている。果たして、他の学校生活の諸側面との関連を視野に入れた際に、その規定力は独立して存在するのだろうか。ここでは先述の先行研究でも触れたように、「多元的学校文化モデル」を援用しながら、仮説2の分析を行う。

従属変数には引き続き「学校生活満足度」を、独立変数には学校生活の諸側面を示す変数として、「ジェンダー(男子ダミー)」「クラス内成績」「学校の勉強に積極的」「学校行事に積極的」「クラス友人満足度」を投入した。そして、部活動に関する独立変数として、「部活動加入ダミー」を投入した(使用した変数の定義は注1の通り)。結果を表3に示す。

専門学科については、独立変数のうち「男子ダミー」以外は有意で、この中では「クラス友人満足度」がもっとも標準化偏回帰係数が高い。ただし、部活動に加入しているかどうかは、これらの変数を投入してもなお有意な効果を持っていることも確認できる。

普通科でも、専門学科とおおむね同様の構造となっているが、男子ダミーも大きな規定力を持っている。「部活動加入ダミー」は10%水準で有意となっている。

表1 「学校生活満足度」×「部活動加入」×「学科」

学科 (2分類)	部活動加入	学校生活満足度		合計	N
		満足	不満足		
専門学科	加入 (%)	64.4	35.6	100.0	(1,421)
	非加入 (%)	50.1	49.9	100.0	(842)
	合計 (%)	59.1	40.9	100.0	(2,263)
0.1%水準で有意 p=0.000					
普通科	加入 (%)	65.5	34.5	100.0	(238)
	非加入 (%)	48.4	51.6	100.0	(186)
	合計 (%)	58.0	42.0	100.0	(424)
0.1%水準で有意 p=0.000					

表2 「学校生活満足度」×「部活動加入」×「学科」

分析対象は専門学科の生徒 Q7F×Q6×Q1B

学科	部活動加入	学校生活満足度		合計	N
		満足	不満足		
工業科	加入 (%)	66.4	33.6	100.0	(569)
	非加入 (%)	54.9	45.1	100.0	(328)
	合計 (%)	62.2	37.8	100.0	(897)
1%水準で有意 p=0.001					
商業科	加入 (%)	62.0	38.0	100.0	(447)
	非加入 (%)	43.6	56.4	100.0	(314)
	合計 (%)	54.4	45.6	100.0	(761)
0.1%水準で有意 p=0.000					
農業科	加入 (%)	65.3	34.7	100.0	(147)
	非加入 (%)	50.0	50.0	100.0	(56)
	合計 (%)	61.1	38.9	100.0	(203)
5%水準で有意 p=0.046					
その他の 専門学科	加入 (%)	63.6	36.4	100.0	(258)
	非加入 (%)	53.5	46.5	100.0	(144)
	合計 (%)	60.0	40.0	100.0	(402)
5%水準で有意 p=0.048					

表3 学校生活満足度の規定要因(1)(重回帰分析)

独立変数	専門学科		普通科	
	偏回帰係数	標準化偏回帰係数	偏回帰係数	標準化偏回帰係数
男子ダミー	0.028	0.015	0.249	0.138 ***
クラス内成績	0.037	0.051 **	0.059	0.081 *
学校の勉強に積極的	0.219	0.177 ***	0.130	0.109 **
学校行事に積極的	0.039	0.070 ***	0.059	0.116 **
クラス友人満足度	0.556	0.516 ***	0.548	0.539 ***
部活動加入ダミー	0.141	0.075 ***	0.123	0.068+
(定数)	-0.045		-0.065	
決定係数	0.389		0.467	
調整済み決定係数	0.388		0.459	
モデル適合度	p=0.000		p=0.000	
N	2,160		403	

注) + : p<0.10, * : p<0.05, ** : p<0.01, *** : p<0.001。

4.4 部活動の多元性

前項では、多元的な学校文化の中で、部活動への加入も学校生活への満足度に寄与していることが確認された。ただし、学校文化が多元的であるように、部活動そのものも多元的であり、その内実をさらに検討する必要がある。

その際、先行研究も踏まえ、2つの視点を設定する。1つには部活動そのものを生徒自身がどのように位置づけているかという評価が考えられる。これを考えるために、「部活動満足度」(Q7E)を分析に加える。また、もう1つには、部活動そのものの形態による影響も考える必要がある。特に、4.1で見たように、専門学科では東京都平均よりも文化部比率が相対的に高かったことを踏まえ、組織形態(運動部/文化部)の違いに着目する必要性は高いと考えられる。以上から、仮説3を検討する。

そこで、前項での重回帰分析の枠組みに上記の変数を加えてみたのが表4、表5である。モデル1では部活動満足度を投入した。また、モデル2では、部活動の形態別の変数を投入した(それぞれ使用した変数の定義は注2の通り)。

モデル1について見ると、専門学科では特に部活動に満足していることが、学校生活満足度にも正の効果を持っている。普通科では、それに加え、部活動への不満はむしろ学校生活満足度に負の効果も持っている。

モデル2について見ると、専門学科では文化部への加入が学校生活満足度に正の効果を持っていることが確認できる。一方、普通科では、文化部への加入が有意な効果を持っておらず、むしろ運動部への加入が若干の正の効果を持っている(10%水準で有意)。

モデル2の結果からは、作業仮説3-2が専門学科については成り立たなかったことに

表4 学校生活満足度の規定要因(2)(重回帰分析)

独立変数	分析対象は専門学科の生徒			
	モデル1		モデル2	
	偏回帰係数	標準化偏回帰係数	偏回帰係数	標準化偏回帰係数
男子ダミー	0.028	0.015	0.038	0.021
クラス内成績	0.034	0.048**	0.035	0.049**
学校の勉強に積極的	0.227	0.183***	0.225	0.181***
学校行事に積極的	0.032	0.058**	0.047	0.085***
クラス友人満足度	0.534	0.497***	0.550	0.512***
部活動満足ダミー	0.257	0.139***	—	—
部活動不満ダミー	-0.039	-0.018	—	—
運動部ダミー	—	—	0.059	0.030
文化部ダミー	—	—	0.180	0.086***
(定数)	0.044		-0.063	
決定係数	0.409		0.389	
調整済み決定係数	0.407		0.387	
モデル適合度	p=0.000		p=0.000	
N	2,194		2,210	

注) +: p<0.10, *: p<0.05, **: p<0.01, ***: p<0.001。

表5 学校生活満足度の規定要因(2)(重回帰分析)

独立変数	モデル1		モデル2	
	偏回帰係数	標準化偏回帰係数	偏回帰係数	標準化偏回帰係数
男子ダミー	0.255	0.141***	0.234	0.130**
クラス内成績	0.046	0.062+	0.054	0.073+
学校の勉強に積極的	0.134	0.113**	0.145	0.122**
学校行事に積極的	0.055	0.109**	0.058	0.116**
クラス友人満足度	0.484	0.475***	0.547	0.536***
部活動満足ダミー	0.287	0.157***	—	—
部活動不満足ダミー	-0.256	-0.102**	—	—
運動部ダミー	—	—	0.137	0.074+
文化部ダミー	—	—	0.036	0.015
(定数)	0.163		-0.060	
決定係数	0.505		0.468	
調整済み決定係数	0.496		0.458	
モデル適合度	p=0.000		p=0.000	
N	409		411	

注) +: p<0.10、*: p<0.05、**: p<0.01、***: p<0.001。

なる。

この意味をもう少し考えるために、次に専門学科の生徒について、部活動形態別に自分の専門分野についての活動の熱心度を見たのが表6、表7である³。資格取得のための勉強などの熱心度は部活動の種類によって有意差はなかったが、表に載せた「専門分野に関わることを趣味などです」「専門分野に関わる情報に本・テレビ・インターネットでふれる」のように、専門性にかかわる、より広範な活動の部分では、文化部加入者のほうが熱心に行っている比率が高い⁴。

では、何がこのような差をもたらすのだろうか。ここで、今回の調査対象校の専門高校における「文化部」の内容を見てみると、普通科にも多くあるような「軽音楽」「美術」「写真」「演劇」「茶道」といった部活動に加え、たとえば工業科では「マシンクラフト(機械工作)」「建築」「模型」「自動車」など、農業

科では「花」「園芸」「バイオ」「農産加工」「製菓・製パン」「造園」「畜産加工」など、学科の特色を活かした部活動が存在していることがわかる⁵。実態としても、グラフィックアーツ科などを有するとある工業高校では、一般的にはあまり大規模な印象のない漫画研究部が、その学校で最大級の部活動であることが紹介されているなどの事例もあった。

また、これは部活動というより、生徒会ないし委員会活動的なものと位置づけられるが、農業高校では各校で「農業クラブ」が組織され、全国団体である日本学校農業クラブ連盟が全国大会などを開催している。

専門高校にはこのように、いわば「専門系」的な活動が授業場面以外にも存在し、冒頭で見た「文化系」部活動への加入率の相対的な高さや、学校生活の他の場面との親和性が生じている可能性がある。

これと関連して、部活動形態を将来の進路

表6 「専門分野に関わることを趣味などでする」×「部活動形態別」

分析対象は専門学科の生徒 Q21C×Q6

部活動形態	専門に関わることを趣味		合計	N
	熱心	不熱心		
運動部のみ (%)	32.3	67.7	100.0	(705)
文化部+かけ持ち (%)	47.5	52.5	100.0	(690)
非加入 (%)	29.7	70.3	100.0	(825)
合計 (%)	36.1	63.9	100.0	(2,220)

0.1%水準で有意 p=0.000

表7 「専門分野に関わる情報に本・テレビ・インターネットでふれる」×「部活動形態別」

分析対象は専門学科の生徒 Q21D×Q6

部活動形態	専門に関わる情報にふれる		合計	N
	熱心	不熱心		
運動部のみ (%)	38.6	61.4	100.0	(707)
文化部+かけ持ち (%)	53.0	47.0	100.0	(689)
非加入 (%)	37.0	63.0	100.0	(825)
合計 (%)	42.5	57.5	100.0	(2,221)

0.1%水準で有意 p=0.000

表8 「どんな仕事をしたいかわからない」×「部活動形態別」×「学科」

Q51A×Q6×Q1B

学科 (2分類)	部活動形態	どんな仕事をしたいかわからない		合計	N
		あてはまる	あてはまらない		
専門学科	運動部のみ (%)	57.3	42.7	100.0	(709)
	文化部+かけ持ち (%)	49.2	50.8	100.0	(691)
	非加入 (%)	54.2	45.8	100.0	(831)
	合計 (%)	53.6	46.4	100.0	(2,231)
5%水準で有意 p=0.010					
普通科	運動部のみ (%)	57.4	42.6	100.0	(155)
	文化部+かけ持ち (%)	54.4	45.6	100.0	(79)
	非加入 (%)	56.4	43.6	100.0	(181)
	合計 (%)	56.4	43.6	100.0	(415)

有意差なし p=0.909

意識との関係で見ると(表8)、普通科では「どんな仕事をしたいかわからない」(Q51A)という質問に対して「あてはまる」(「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の合計)と「あてはまらない」(「あまりあてはまらない」+「まったくあてはまらない」の合計、以下同)の比率は、部活動の加入/非加

入、および運動部/文化部の間で有意差は見られない。他方、専門学科では文化部で「あてはまらない」の比率がやや高く、すなわち将来の仕事への見通しがある生徒の比率が多いことを示している。これは、「専門系」を含む専門学科の層が、職業への意識がより明確になっている可能性が考えられる。

5 まとめと考察

これまでの分析によって、専門学科でも学校への適応に関して、部活動が果たす一定の役割が確認できた。部活動の加入は学校生活満足度に正の効果をもたらしており、また部活動そのものに満足している生徒で特にその効果が高かった。

また、専門学科における学校満足度を検討した際、文化系部活動の持つ効果が、普通科とは若干異なることに着目した。従来、文化部はあまり着目されてこなかったが、その実態や機能はより詳細に検討される必要があるだろう。

そして、特に専門学科については、専門分野とも関連した活動のできる「専門系」部活動の持つ意味の可能性を検討した。専門学科における「専門性」は、授業における専門教科や、各種の資格取得などを中心にイメージされると思われるが、このように部活動などの課外活動面も視野に入れることで、新たなとらえ方もできるのではないだろうか。

他方、部活動の加入率を高めれば、単純に学校適応が進むと考えるわけにもいかないだろう。分析で見たように、部活動に満足していれば学校生活への満足度も高まっているが、すべての生徒が部活動に満足しているわ

けではない。また、そもそも4.1で見たように、今回の調査対象校での部活動加入率は専門学科全体で60%台である。専門学科でも、一方では専門分野に興味関心が高い生徒もいれば、専門分野との間に不適應を感じている生徒もおり、後者の生徒にとっては部活動にまで「専門性」を追求されると、ますます学校生活が窮屈になる可能性も考えられる。そうしたバランスのあり方をどう考えていくかも実践上の課題であろう。

分析上の問題点としては、今回の回答者データからは「文化部」内部での判別（「専門系」かどうか）ができないので、「専門系」の効果がどのくらいであるのかを十分にとらえることはできない。この点については、今後さらに量的・質的双方の面から分析される必要があるだろう。

また、先行研究で一部触れられている、学校外の生活や文化接触などとの関係の検討は本稿で行えなかったため、今後の課題としたい。

最後に、部活動は学校や地域などによる取り組みの多様性も大きいことにも留意する必要がある。したがって、本稿での分析も、早急な一般化には慎重である必要がある。様々な地域や学校タイプについて、引き続き地道な実証的研究が積み重ねられていく必要があると考えられる。

<注>

- 1 独立変数の定義は以下の通り。
「男子ダミー」(Q 2 A、男子=1)、「クラス内成績」(Q 11 A、5段階)、「学校の勉強に積極的」(Q 9 A、4件尺度を反転)、「学校行事に積極的」(Q 13 A [文化祭や学芸発表会] および Q 13 B [体育祭(運動会)])。各4件尺度を反転させて合計(アルファ係数:専門学科=0.812、普通科=0.814)、「クラス友人満足度」(Q 7 D、4件尺度を反転)、「部活動加入ダミー」(Q 6、部活動加入者=1)。
- 2 部活動の満足度に関する独立変数:「部活動満足ダミー」(Q 7 Eで「とてもあてはまる」および「まああてはまる」=1) および「部活動不満足ダミー」(Q 7 Eで「あまりあてはまらない」および「まったくあてはまらない」=1)。基準変数は部活動非加入。
部活動の形態別の独立変数:「運動部ダミー」(運動部加入者=1) および「文化部ダミー」(文化部加入者=1)。ここでは「かけ持ち」は運動部/文化部どちらの影響によるか判別できないので、どちらのダミー変数にも含めていない。
- 3 表6、表7では、何らかの形で文化系部活動に加入していることの影響を見るため、「文化部」と「かけ持ち」をまとめている。「かけ持ち」を除いて「文化系のみ」にしても傾向は同じである。
- 4 時間的な前後関係を考えると、表6、表7は独立変数(部活動への加入)と従属変数(「専門分野に関わることを趣味などです」「専門分野に関わる情報に本・テレビ・インターネットでふれる」)が逆の可能性も十分に想定できる。ただし、ここでは厳密な因果の向きを特定するというより、両者の関連性(専門に関連する活動を行える場が専門高校にあるということ)を示すことに重点を置いているため、このような形で示した。

- 5 商業科では、「珠算」「簿記」などの部活動があるが、他の学科に比べると、「専門系」の部活動は少ない印象を受ける。紙幅の関係で詳細なデータは省略するが、商業科以外の専門学科では文化部加入者のほうが運動部加入者より学校生活満足度が高かったが、商業科では運動部加入者のほうが高かった。

〈引用文献〉

- 長谷川祐介、2005、「部活動経験者の高校生活——活動内容の多様性に着目して」『広島大学大学院教育学研究科紀要（第三部 教育人間科学関連領域）』54: 71-8.
- 文部科学省、2008、「中学校学習指導要領案（平成20年2月）」
(http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/news/080216/003.pdf, 2009.6.26).
- 中澤篤史・西島央・矢野博之・熊谷信司、2009、「中学校部活動の指導・運営の現状と次期指導要領に向けた課題に関する教育社会学的研究——8都県の公立中学校とその教員への質問紙調査をもとに」『東京大学大学院教育学研究科紀要』48: 317-37.
- 西島央編著、2006、『部活動——その現状とこれからのあり方』学事出版.
- 西島央・藤田武志・矢野博之・荒川英央・中澤篤史、2003、「部活動を通してみる高校生活に関する社会学的研究——3都県調査の分析をもとに」『東京大学大学院教育学研究科紀要』42: 99-129.
- 白松賢、1995、「生徒文化の分化に与えた部活動の影響——高等学校を中心に」『子ども社会研究』創刊: 80-92.
- 東京都教育委員会 課外活動振興協議会、2007、「部活動振興基本計画——運動部活動振興に向けた20の提言」
(http://www.kyoiku.metro.tokyo.jp/press/pr070412bs/pr070412_keikaku.pdf, 2009.6.25).
- 山口正二・岡本貴行・中山洋、2004、「高等学校における部活動への参加と学校適応度との関連性に関する研究——学校類型の視点より」『カウンセリング研究』37(3): 232-40.